

バルカン戦争期のヘレニズム言説

MURATA, Nanako / 村田, 奈々子

(出版者 / Publisher)

法政大学言語・文化センター

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

言語と文化 / 言語と文化

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

215

(終了ページ / End Page)

234

(発行年 / Year)

2014-01-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009687>

バルカン戦争期のヘレニズム言説

村田奈々子

1. はじめに

バルカン戦争期、新聞や雑誌といったギリシアのメディアは、活発な報道を展開した。数多くの記事や評論で、刻々と変わりゆく戦況や外交関係が分析され、ギリシアの軍事作戦に関するさまざまな意見が表明された。ギリシア軍が占領した、あるいはこれから獲得しようとしている都市や地域が、ギリシア領に併合される正当性を持つことをさかんに論ずる者がいた。一方で、ギリシア軍の戦略を消極的であるとみなし、国益を守るためもっと積極的な作戦をとるべきであると、政府を批判する者もいた。これらの言説においては、ヘレニズム(ελληνισμός)という用語が、自らの主張を説得的なものとするための支えとなった。

興味深いことに、バルカン戦争期にさまざまな言説において用いられたヘレニズムは、固定されたひとつの意味内容を示しているわけではない。ヘレニズムの意味は実に多様である。本稿では、バルカン戦争期にギリシアのメディアで使用されたヘレニズム言説を分類し、それらの言説の具体的内容をみてゆく。この作業によって、ヘレニズムが変幻自在にその意味内容を変えることが理解されるだろう。さらには、さまざまな意味を持つヘレニズムが、ギリシア・ナショナリズムの宣伝にとっていかに重要であったかが明らかにされるだろう。

本稿では、この時期の新聞や雑誌で用いられたヘレニズムを3つのカテゴリーに分類する。第一に、ギリシア民族としてのヘレニズムである。このヘレニズムは、民族としてのギリシア人として理解され、それとの対立項、すなわち対立する民族を想定する。第二のヘレニズムは、ギリシア人のプラスの特徴を意味している。このヘレニズムは、特に文明の概念と結びついている。第三

のヘレニズムは、ギリシア人であるとの意識の表明として用いられる。このヘレニズムは、民族アイデンティティの判断材料として、高度に主観的な基準を提供している。以下では、これら3つのカテゴリーの具体例をみていく。

2. ギリシア民族としてのヘレニズム

第一次バルカン戦争ではオスマン帝国のトルコ人が、第二次バルカン戦争ではブルガリア人が、ギリシア人にとっての敵となった。さらに、第一次バルカン戦争中に独立国の建国を宣言したアルバニア人も、ギリシアの領土拡大を阻む敵とみなされた。セルビアとギリシアで分割しようとしていた領土が、アルバニアがオスマン帝国から独立することで、アルバニア領となる可能性が生まれたからである。

このようなギリシア人と他民族の敵対関係を背景に、ヘレニズムはギリシア王国内外のギリシア人の総体として表現された。ヘレニズムは、敵対する他民族に対置される語であり、ギリシア民族全体を意味する用語として用いられた。

第一次バルカン戦争中に書かれた「犠牲」と題されたエッセイの例をみる。論者は、これまでマケドニアとイピロスで多くのギリシア人が犠牲を払い、祖国を解放するため数世紀にわたって血を流してきたと述べる。それにつづけて、論者は以下のようにつづける。

解放されたギリシアの土地は、神に捧げる酒として、これ以上の血、無駄な血、隷属する子供たちの血を欲しない。解放されたギリシアの地は〔これまで流されてきた〕血を集めて、血に飢えた卑怯な殺人者たちに恨みを抱く。彼らの首領とすべての民族に恨みを抱く。彼らはアジアの奥深くからやってきて、ヘレニズムの胸を切り裂き、500年にわたってそのはらわたを食い尽くしたのだ⁽¹⁾。

「血に飢えた卑怯な殺人者たち」とは、トルコ人を意味している。このエッセイの前半で論者は、トルコ人のことを「人を殺し、放火し、略奪し、凌辱し、尊い自由を求める数千の無実の人々に災いと苦しみをもたらす」⁽²⁾者と呼んでいる。「数千の無実の人々」とは、もちろんギリシア人である。論者は、

対立軸としてのトルコ人とギリシア人を提示し、このふたつの民族が支配者と被支配者という関係にあることを明らかにしている。この引用中のヘレニズムは、トルコ人の不正と暴力的な支配に翻弄されてきたギリシア人を意味している。ヘレニズムの「胸」や「はらわた」がずたずたに分解されていくさまは、ギリシア民族全体を一個の人間としてとらえ、トルコ人の支配によって、肉体だけでなく精神的にも味わわされた苦しみを、比喩的に示していると考えられる。

ブルガリア人もヘレニズムの対立項のひとつである。第一次バルカン戦争では、ブルガリアはギリシアの同盟国だった。しかし、ギリシア人は、ブルガリア人を信頼することは決してなかった。オスマン帝国領マケドニアの獲得をめぐって19世紀末から続いていた両者の対立が、その背景にある。世紀転換期、ギリシア人とブルガリア人の対立は激化した。ブルガリア人は、マケドニアでギリシア人ゲリラ部隊と戦う一方で東ルメリアやブルガリアのギリシア人コミュニティを暴力的に破壊しようとした。将来的にブルガリアを民族的に同質な国家にするためだった。1906年夏にブルガリアと東ルメリアで勃発した、ブルガリア人によるギリシア人を攻撃対象とした暴力事件・破壊行為は、それらの地域で数世紀にわたって存続していたギリシア系コミュニティに破滅的な被害をもたらした。それらのコミュニティから、多くのギリシア人が難民としてギリシア王国に流入した⁽³⁾。この出来事を契機に、ギリシア人は、以前にもましてブルガリア人は大敵であるとの確信を深めることになったのである。「世界中で、ブルガリア民族ほど、過去においてヘレニズムを嫌い、現在もヘレニズムを嫌っている民族は存在しない。彼らは、ヘレニズムを追放し、全滅させるために、合法的、非合法的、さらには悪辣な手段を用いるのだ。」⁽⁴⁾第一次バルカン戦争中、ペトロス・アクシオティダスは、1906年のブルガリア人の暴力に言及しながらこのように論じた。

したがって、第一次バルカン戦争で、バルカン同盟軍——セルビア、モンテネグロ、ブルガリア、ギリシア——の勝利によって、オスマン帝国ヨーロッパ領のオスマン支配が終焉を迎えたとき、ギリシア人は、ギリシアの国益をそこなう次なる脅威はブルガリア人であることを即座に悟ったのである。1913年5月のロンドン条約締結で、第一次バルカン戦争は終わった。同月、マヌリス・コスタンダスは「ブルガリア人」と題されたエッセイで、ブルガリア人は必ずやギリシア人を相手に戦争をはじめるだろうと、ギリシア人読者に警告した。

コスタンドスは、「われわれギリシア人にとって、バルカン同盟とトルコとの戦争によってもたらされた最も重大な事態——ギリシア民族の将来にとって非常に意味をもつことになるであろう事態——は、われわれがもはやトルコ人と国境を接していないということである。われわれの隣人は、ブルガリア人となるのだ」と論じた⁽⁵⁾。そして、ブルガリア人が隣人となる現実が、ヘレニズム、すなわちギリシア人にとって何を意味するのかを、彼は以下のように説明する。

ヘレニズムは、15世紀にわたって、ブルガリア人と激しい戦いをほぼ間断なくつづけている。今日の状況が示しているのは、この戦いがこれからも続くということである。積年の憎しみは、消え去ることはなかった。ブルガリア人を常に奮い立たせ、ヘレニズムに対し、計画的に効率よく戦いをしかけようとする考えが存在しつづけた。したがって、われわれに必要なのは、今日われわれの味方であると同時に敵でもある隣人が、正確にはどういう特徴をもつ人々なのかを知ることである。近い将来、彼らが今日の状況が示しているより、ずっと無慈悲であることがわかるだろう⁽⁶⁾。

ブルガリア人に対するギリシア人の敵対感情は、ギリシア王国内のギリシア人の安全を確保することだけで満足しているかのようなギリシア政府に対する、批判的言説を生み出した。ギリシア政府は、ブルガリア人が支配している領域に暮らすギリシア人の悲惨な状況にほとんど注意を払わず、王国外のギリシア人を見捨てていると批判したのである⁽⁷⁾。ロンドン条約締結直後、リドス・ボダヴロスは、「ブルガリアのヘレニズムを救おうと思うなら、ギリシアは今さらに強くならねばならないという結論にわれわれは達している」⁽⁸⁾と論じて、政府が国境外のギリシア人にも目を向けるよう促した。さらにボダヴロスは、別のエッセイで、ギリシア人とブルガリア人の敵対関係は継続していることを繰り返し強調し、「ブルガリア人の足元で心を打ち砕かれている見捨てられたヘレニズム」⁽⁹⁾の安全を確保するために、ブルガリア人を相手に戦いを挑むよう、ギリシア政府を駆り立てた。

実際、ロンドン条約は、バルカン諸民族の間でみられた多くの係争点を未解決のままにしていた。したがって、誰もが予想したとおり、直後に第二次バルカン戦争が勃発した。今度はブルガリア人が、ヘレニズム、すなわちギリシア

人の敵として立ち上がることになったのである。

ヘレニズムは、ギリシア人とアルバニア人の敵対関係の文脈でも、ギリシア民族を意味する語として用いられている。第一次バルカン戦争中のアルバニアの独立宣言は、ギリシア人にとって寝耳に水だった。アルバニア領に併合される可能性のある地域——ギリシア人が北イピロスと呼ぶ地域——には、ギリシア人コミュニティの長い歴史があった。したがってギリシア人は、当然この地域も自国領として併合できる権利を有すると考えていたのである。アルバニアが独立国家として国際社会に認められるのか、もしそうであるならばその国境線はどこにひかれるのか——すべてはヨーロッパ列強の手に委ねられていた⁽¹⁰⁾。そのような状況下で、ギリシア人は黙ってはいなかった。北イピロスを自国領とすべく、声を上げたのである。

1912年12月、ギリシア軍は、モスホポリス（ヴォスコポヤ）を占領した。モスホポリスは、1769年にイスラーム教徒のトルコ人とアルバニア人によって破壊されるまで、北イピロスのギリシア人コミュニティの中心地として栄えた町だった。アレクサンドリアの総主教秘書D. カリマホスは、モスホポリスを17世紀～18世紀のアテネと呼び、オスマン支配下にあってもギリシア風の生活が営まれ、ギリシア文化が栄える様子を描写した。エッセイ「モスホポリスの文明」でカリマホスは、モスホポリスが新国家アルバニアの領土に併合されることを阻止すべく、ギリシア軍のモスホポリス占領を強く支持した。このエッセイの中で彼は、ヘレニズムを、二項対立の民族関係で規定されるギリシア人として用いている。「トルコ＝アルバニア人、数世紀にわたるヘレニズムの被害者たちは、モスホポリスの何にも敬意を払わなかった。[その結果]すべての教会のうちわずか20の教会だけが破壊をまぬがれて残ったのである。」⁽¹¹⁾

同時期、ギリシア軍は、北イピロス／西マケドニアのコリツァ（コルチュ）も占領した。しかし、ヨーロッパ列強の大使会議で、コリツァはアルバニア領に含まれることが決定された⁽¹²⁾。ギリシア人はこの決定におとなしくしたがうことを拒んだ。カリマホスは、コリツァには少なくとも500年にわたってギリシア人が住み、ギリシア人による知的活動が続けられてきたと主張した。こう述べることで、この地域がギリシア化したのは19世紀後半以降のことにすぎないとするアルバニア・ナショナリズムを支持する見解を一蹴しようとしたのである。カリマホスによると、コリツァではギリシア精神に裏打ちされた伝

続が継続している。それは、特にギリシア人コミュニティの活発な知的活動に見出すことができる、と彼は論じる。

2万人の熱心なヘレニズムが、複数のギリシア学校に2,500人ものギリシア人の子供を通わせている。それに比べて、アルバニア学校はひとつで、30人とか70人が通っているだけだ。このアルバニア学校は、20年のあいだ熱心にやってはきたものの、無駄だった。このことは、この町がアルバニア人の学問の中心であるという主張がいかに笑いの種でしかないとを示している⁽¹³⁾。

ここでもやはり、ヘレニズムは、アルバニア人と対立するギリシア人を意味する語として用いられている。

コリツァのギリシア人住民たちも、ヨーロッパ列強の決定は恣意的であるとみなし、これに反対する姿勢を示した。民族的・歴史的な見地から、コリツァは純粋にギリシア人の町である、と彼らは強く主張した。住民たちは、アルバニア人民族主義者に有利な国境線を画定しようと活発に外交活動を展開していたイタリアとオーストリアを、皮肉交じりに非難した。「[われわれの]友人であり兄弟であるイタリア人、そして彼らの同盟者であるオーストリア人は、コリツァにこれほど大規模なヘレニズムを発見するとは想像もしていなかったのだ。[中略]ベドウィンか、あるいは野蛮で粗野な姿をしたアルバニア人を発見すると、彼らはおそらく思っていたのだ。』⁽¹⁴⁾

ヘレニズムが、以上のような対立する民族関係の観点から用いられるとき、その対立項であるトルコ人、ブルガリア人、アルバニア人には、多くの場合マイナスの特徴づけがなされている。これは、当時のギリシア人の他民族に対する偏見を示している。トルコ人、ブルガリア人、アルバニア人は、ギリシア人の目には、等しく洗練されていない、無知で暴力に訴えるしか能のないバルバロイ（野蛮人）に映ったのである。最大の敵であるブルガリア人は、とりわけ好ましくない特徴を持つ民族として描写された。ギリシア人にとって、ブルガリア人は、「殺人者、暴漢、人間にあらざる者、匪賊、野卑な者、忌み嫌われる者」⁽¹⁵⁾だった。さらに、ブルガリア人はモンゴル系の血を引く者であると繰り返し主張された。そうすることによって、ブルガリア人の「他者性」を、ギリシア人一般により一層印象づけようとしたのである⁽¹⁶⁾。

これとは対照的に、ギリシア人は、プラスの積極的な特徴を持つ民族として描写された。そして、そのようなギリシア人に付されたプラスの特徴を意味する語として、ヘレニズムが使用されている。次節では、そのような第二のヘレニズムの例をみていく。

3. ギリシア人のプラスの特徴を意味するヘレニズム

バルカン戦争中、ヘレニズムはギリシア人の文化資産としてしばしば言及された。このヘレニズムは、ギリシア人の歴史、伝統そして知的生活に高い価値を置く、プラスの積極的な特徴を意味するものとして表現されている。同時に、20世紀初頭の近代世界に適合した社会の進歩に貢献するものとみなされる。言い換えれば、このヘレニズムは、ギリシア人の世界の過去と未来を同時に包み込み、それらに対して責任を負っている。文化資産としてのヘレニズムの力を主張することで、バルカン戦争中のギリシア人は、ギリシア軍が占領した土地がギリシア王国の領土として併合されることの正当性を補強しようとしたのである。

第一次バルカン戦争で、ギリシア軍は南西マケドニアの町ヴォデナを占領した。ヴォデナは、スラヴ語／ブルガリア語で、水の豊富な場所を意味した。実際、この地は水資源に恵まれていた。今日においても、この地は美しい風景と滝で有名である。この町は、ギリシア語では、エデサと呼ばれた。この町がスラヴ語の名称をも有するという事実は、ギリシア人のみがこの地に暮らしていたわけではなかったことを示している。しかしながらギリシア人は、この地がギリシア領として併合されるべきであるとする根拠を、この町の歴史と伝統に求めたのである。

エッセイ「新たなギリシアの町——ヴォデナ」で、ヴティエリディスは、ヴォデナが古代マケドニア王国の都アイガイであると指摘し、この王国の歴史がいかにギリシアの歴史の歩みのなかに統合されていったのかを語る⁽¹⁷⁾。

この小さな王国は成長する。そしてその都——自然がつくりあげた近寄ることのできない要塞——は、すべてのもの、新たな野望を生み出す。その野望は、いまやヘレニズムの思想を与えられて育っている。そのような環境で育ったアレクサンドロス1世⁽¹⁸⁾は、ペルシア戦争の時代に真のギリ

シア人と認められることを欲する。そして、オリンピック競技会では、ギリシア人の審判たちは、アレクサンドロス1世が真のギリシア人であると宣言する。アレクサンドロス1世は、ペルシア人との戦いでギリシア人を支援する。彼はアテネの市民と呼ばれる。彼はピンダロスを宮廷に招く。こうして、アレクサンドロス1世は、マケドニアを偉大なヘレニズム圏のなかに導き入れる。あたかも、マケドニアがすでにギリシアの地であるかのように⁽¹⁹⁾。

ここでのヘレニズムは、文明化されたギリシア風の生活、文化、伝統を暗示している。ペルシア戦争やオリンピック競技会、そして著名なギリシアの詩人ピンダロスを列挙し、それらをマケドニア王アレクサンドロス1世と直接的に結びつけることによって、ヴティエリデスは、ヴォデナの歴史とギリシアの歴史の親近性を印象づけようと試みている。

ギリシアとブルガリアそれぞれのナショナリズムの高揚を背景に、古代マケドニアの民族的起源について、19世紀末以降さかんに議論がなされるようになっていた。そこでは、この引用にあるアレクサンドロス1世の子孫にあたるアレクサンドロス大王はギリシア人だった、あるいはブルガリア人だったという対立する言説がせめぎあっていた⁽²⁰⁾。このヴティエリデスのエッセイは、紛争地マケドニアのギリシア性を強調する数ある文献の典型的な例である。

ヴティエリデスは、ヴォデナは、ブルガリア人による支配とセルビア人による攻撃を経験したのちオスマン帝国領になったことを認めている。彼は、ヴォデナの住民がスラヴ人の言語の影響を受けたことも否定しない。しかし、ヴォデナではギリシア的精神(ελληνικό πνεύμα)が消滅することはなかった、とヴティエリデスは論じる。ギリシア的精神は文化的価値を意味するヘレニズムを支える要素である。ヴォデナにおけるギリシア的精神の起源は、マケドニア王国の初期の時代にさかのぼることができる。その精神は、今日のヴォデナの住民に受け継がれているとして、彼は以下のように書いている。「この町における、ブルガリア主義に対するヘレニズムの戦いは、この数年熾烈を極めた。しかし、ギリシア的精神が、完全な勝利を収めた。この50年間、ほとんどすべてのギリシア人が、マケドニア＝スラヴ語を話していた。今日、街の通りやギリシア人のすべての家庭から聞こえてくるのは、純粋なギリシア語である。」⁽²¹⁾

ヴティエリディスにとって、ギリシア語の優位こそが、ギリシア精神によって支えられたヘレニズムの勝利を証明していた。さらに、このギリシア的精神はヴォデナのあらゆる領域で観察できる、と彼は指摘する。ヴォデナのブルガリア人が下働きに甘んじている傍らで、ギリシア人は町の商工業を牽引している。町にある2台の電動化された紡績工場は、ギリシア人が導入したものである。ギリシア人の近代的な進取の精神は文明のしるしであり、ヘレニズムの重要な属性のひとつである。ヴォデナのギリシア人住民の繁栄を根拠に、この町が古代に持っていた偉大さは再生するであろう、とヴティエリディスは結論づける⁽²²⁾。

第一次バルカン戦争の結果、オスマン帝国はほぼすべてのヨーロッパ領を失った。オスマン帝国に残されたのは、エーゲ海の港エノス（エネズ）から黒海の港ミディア（ミディエ）を結ぶ線から東側の狭小な領域のみだった。ブルガリア人は、その境界線の西側に位置したトラキア地方を占領した。ギリシア人は、ブルガリア人のトラキア獲得に不満だった。トラキアは古代から中世をとおしてギリシア文化圏の一部であり、それゆえギリシアこそがトラキアの所有権を主張できる、と彼らは考えていたのである。確かに、トラキアにはブルガリア人よりもギリシア人のほうが多く住んでいた⁽²³⁾。トラキアは、ギリシア人のメガリ・イデア——ギリシア人が住む、あるいは歴史的にギリシア文化が優越した領域を自国領として併合し、コンスタンティノーブルを首都とするギリシア国家を目指した、ギリシア人の領土拡張の野望——の観点からも重要とみなされた地方だった。トラキアは、ギリシア人の最終目的地コンスタンティノーブルの途上に位置した。したがって、より大きなギリシア国家の創造という彼らの宿願を実現させるためには、ギリシア人は、どんな犠牲をはらってもトラキアを獲得しなければならなかったのである。ギリシアのメディアは、この地がギリシア固有の領土であることをさかんに宣伝した。

エッセイ「トラキアのヘレニズム」で、ペトロス・アクシオティダスは、トラキア一帯はギリシア的な要素を維持しつづけている地域であると論じた。彼は、地理的・歴史的・文化的観点からトラキアのギリシア性を説明する。トラキアは、コンスタンティノーブルの西に隣接している。このため、この地のギリシア人住民は、言語的および民族的な純粋性を保つことができた。アクシオティダスによると、コンスタンティノーブルは、常にギリシア文化とギリシア人の知的活動の中心地であった。コンスタンティノーブルで、ギリシア的な教

養とギリシア人としての民族意識が育まれたのである。1453年、オスマン帝国がコンスタンティノープルを占領したあと、数千のギリシア人がこのビザンツ帝国の都を離れ、東トラキアに定住した。このことが、「あらゆる観点からいって、トラキアのギリシア的特徴を維持することに大きく貢献した」⁽²¹⁾のである。アクシオティダスは、途切れることのない文化的・知的ヘレニズムの文脈のなかにトラキアがおかれている様子を、以下のように描く。

そしていまや最後のひとつの村まで、トラキアのいたるところで、ギリシア人コミュニティが男子の学校や女子の学校を維持している。これらの学校は、文明と進歩をもたらしている。これらの学校を通して、ヘレニズムは常にすべての共存する諸民族を力づけ、すべての高貴で進歩的な仕事で、指導的な役割を果たしているのである⁽²⁵⁾。

アクシオティダスの理解によると、ギリシア人の学校教育は、ヘレニズムの価値ある文化的・知的伝統を維持するために不可欠の要素である。同時に、このヘレニズムは、必ずしもギリシア民族だけに貢献するものではない。このヘレニズムは、文化の面からも、近代世界における社会の進歩という面からも、ギリシア人と共存する他の民族にも資するものである。その意味では、文化的・知的ヘレニズムは、必ずしも民族的にギリシア人に属する者だけに固有のものではなく、他の民族も包摂する可能性を持っていることが示されている。

しかし一方で、ギリシア語を話すということがギリシア民族の証であり、文化的・知的ヘレニズムの恩恵にあずかることのできるのは、そのような者たちに限られるとする排外的な立場が根強かったことも確かである。実際、アクシオティダスも、民族アイデンティティの基準を言語にしている節がある。彼は、ひとつの興味深いエピソードを紹介する。二度のバルカン戦争をととして最大の激戦となった東トラキアのリュレ・ブルガスーブニ・ヒサルでの戦闘で、ブルガリア軍はオスマン軍を破った⁽²⁶⁾。この勝利のあと数か月して、東トラキアに行ったあるブルガリア人は、そこにギリシア人だけが住んでいることを発見した。アクシオティダスによると、このブルガリア人はこう言ったという。「学校で、この地はブルガリア人のものであると、われわれは教えられたのではなかったか。しかし、どこに行こうと、どこを旅しようと、ギリシア人だけに会おう。ブルガリア人はいったいどこにいるのだ。彼らのために、

我々は戦ったというのに。』⁽²⁷⁾ここに言う「ギリシア人」とは、ギリシア語を話す者である。アクシオティダスによると、ギリシア語がこのように広く流布している状況が、トラキアのヘレニズムの継続を確かなものにしているのである。「数世紀にわたって野蛮な民族の侵入を受けながらも、トラキアにおいてギリシア語は維持された。』⁽²⁸⁾そして、いまや「隅々にいたるまで、ほとんど純粋なギリシア語が話されている。』⁽²⁹⁾彼はこのように述べて、ギリシアがトラキアを領有する権利を主張するのである。

ギリシア語とギリシア人の教育活動こそがヘレニズムの動かぬ証拠であるとの確信は、アクシオティダス以外の論者の主張からも見てとれる。コリツァの歴史に言及する際、例えば前出のカリマホスは以下のように述べる。「1769年、モスホポリスが崩壊して60,000人のギリシア人が去った。その一波がコリツァにもやってきた。すると、この町のヘレニズム、ギリシア語による会話、ギリシア的な教養、そしてギリシア文明に内包されるヘレニズムに再び火がともされたのである。』⁽³⁰⁾カリマホスによると、モスホポリスは、かつて「オスマン支配下におけるヘレニズムの最も文明化された中心地」⁽³¹⁾だった。モスホポリスは、教育や知的精神活動を通して、「隷属する」ギリシア人を支えた。モスホポリスには、新アカデミーに代表される文化・教育機関があった。1720年にはギリシア語印刷所が設立された。これは、1627年設立のコンスタンティノーブルのギリシア語印刷所に次ぐものだった。商売やビジネス活動によって富を蓄えた裕福なギリシア人は、ギリシア王国に教育の向上を目的とした多額の寄付をした。これらすべての機関や活動は、モスホポリスの人々の強いヘレニズム意識を体現していた⁽³²⁾。モスホポリスからコリツァに移住したギリシア人は、モスホポリスで享受していたヘレニズムの繁栄を再び生みだすことに成功したのである。カリマホスは、「コリツァにおけるヘレニズムの新たな絶頂期は、1850年にはじまった」⁽³³⁾と述べる。「ラソン」と呼ばれるギリシア学校のための特別な基金が、その代表的な例である。この教育基金を利用して学ぶことで、コリツァのギリシア人は、知的なかたちで「母国」ギリシアに貢献しようとした。コリツァのギリシア人住民のなかには、モスホポリスの住民と同様に、ギリシア人子弟の教育の向上のために、ギリシア本国に直接財産を寄贈する者もいた⁽³⁴⁾。さらに、コリツァのギリシア人コミュニティは数多くの公的な施設を整えた。ある論者は、「複数の教会、複数の学校の建物、孤児院、そして救貧院は、ヘレニズムの世界の最も優れた側面である」と讃えてい

る⁽³⁵⁾。

4. ギリシア人としての自己認識を意味するヘレニズム

前節で見た第二のヘレニズムは、ギリシア語を話すことを不可欠の構成要素とする傾向があった。この観点に立つと、ギリシア語を話す者だけが、ヘレニズムの恩恵に浴することのできる構成員とみなされることになる。このヘレニズムは排外的であり、非ギリシア語話者にたいして門戸を閉ざし、ヘレニズムの力が及ぶ領域をせばめる可能性を持っていた。

しかし、本節で見えていく第三のヘレニズムは、第二のヘレニズムの排外的な特徴を補完する役割を果たしている。このヘレニズムは、母語が何語であれギリシア人であると自覚する、その自己認識を指す。第一のヘレニズムが、実体としてのギリシア人を想定していたのに対して、このヘレニズムでは、ギリシア人としての感情や意識に重心がおかれている。ギリシア語に基づくギリシア文化や歴史的伝統の領域から排除された者たち、とりわけ非ギリシア語話者は、この第三のヘレニズムによって、ギリシア民族の共同体に参加することができた。

近代ギリシア史を専門とするコリオブロス⁽³⁶⁾は、19世紀後半以降のマケドニア住民のアイデンティティ形成の過程について、以下のように論じている。「マケドニアの住民のアイデンティティを決定づける際に考慮されたのは、言語ではなく、ギリシア人であるという『感情』、ギリシアの民族的伝統と信仰への彼らの愛着であった。言語は学ばれもするが、学ばれない可能性もあるだろう。一方『感情』は、〔言語習得の可否に比べて〕変動しないものであり、外部からの圧力や操作に支配されにくかった。」⁽³⁶⁾ バルカン戦争期には、マケドニアの住民だけでなく、ギリシアが獲得したいと望んだ地域に住んでいた人々の一部も、ヘレニズムの語を用いて、みずからのギリシア人としての自覚を表明したのである。

しかしながら、ギリシア語が、ギリシア人意識を持つことを証明する客観的な判断基準のひとつと考えられたことも事実である。例えば、フリストヴァシリスは、かつてイビロス一帯で権力をふるったアリ・バシャのギリシア性を、彼のギリシア語の運用能力の点から論じている。フリストヴァシリスによると、アリ・バシャは民族的にはアルバニア人だったけれども、自らをギリシア

人と感じていた。アリ・パシャは、18世紀から19世紀の世紀転換期に、アルバニア国家ではなくギリシア国家の建設を目指していたという。フリストヴァシリスは、この主張を裏付けるために、アリ・パシャのギリシア語嗜好と支配システムにおけるギリシア語の優位について、以下のように述べる。

アリ・パシャはアルバニア人支配者というよりも、ギリシア人支配者という意識を持っていた、とわれわれはみなすことができよう。というのは、書き言葉として彼が知っていたのはギリシア語だけだったのだから。彼の邸内および廷内、そして統治組織内で使用された唯一の言語は、ギリシア語だったのだから。彼の本拠地であるイオアニナから離れていた軍事指導者や、イオニアギリシア人やアルバニア人のさまざまな組織とは、唯一ギリシア語という手段を用いて、彼は連絡をとりあったのだから…⁽³⁷⁾。

アリ・パシャの時代からおよそ1世紀を経たバルカン戦争期には、ギリシア語を話したり書いたりすることのできないアルバニア語話者も、ギリシア人としての意識を根拠に、ギリシア人とみなされえた。ギリシア・ナショナリズムのコンテクストでは、彼らはアルバニア人ではなかった。マケドニアのスラヴ語話者が、スラヴ語話者ギリシア人 (σλαβόφωνοι Έλληνες) と呼ばれたのと同様に、彼らはしばしばアルバニア語話者ギリシア人 (αλβανόφωνοι Έλληνες) と呼ばれた。

「イピロスのギリシア性とアルバニア語話者ギリシア人の意識」と題されたエッセイは、ギリシアに不利なかたちでギリシアとアルバニアの国境を決定しようとしていた、国際アルバニア国境画定委員会に対して発せられた文書である。論者は、アルバニア——特に、ギリシア人が北イピロスと呼ぶ南部地域——は、歴史的に「ヘレニズムの揺籃の地」であることを強調する。この地は、古代からギリシア的特徴を維持しつづけてきた。中世においても、イピロスは「ヘレニズムの重要な炉辺のひとつ」だった。その好例が、ビザンツ帝国の後継国家のひとつイピロス (エベイロス) 専制公国である。1204年、コンスタンティノーブルが第四回十字軍によって陥落すると、ミカエル・アンゲロス・コムネノスは、「ヘレニズムの砦」として、ギリシア本土ではなくイピロスに専制公国を建国したのである⁽³⁸⁾。

論者はさらに続ける。歴史を通じて多くの野蛮な民族がイピロスに侵入した

にもかかわらず、イピロスのギリシア的特徴は維持された。侵入した野蛮な民族のなかには、ギリシアの「魔法の力」によって、ギリシア人になった者たちもいた。その結果、ギリシア語が住民の唯一の言葉として用いられた。しかし時の経過とともに、ギリシア語を使わない住民たちが現れた。彼らはアルバニア語の語彙を使いはじめたのである。論者は、その原因は住民たちがアルバニア人居住地域と隣接して暮らしていたことと、イピロスにおけるイスラーム化の進行にあるとする⁽³⁹⁾。

しかし、この言語上の変化は、イピロス住民のギリシア人としての感情に何ら影響を与えなかった、と論者はいう。「イピロスのアルバニア語話者のギリシア人としての意識は強く、確固たるままであった。」アルバニア語やアルバニア文化の専門家が、イピロス住民はアルバニア人であると主張したところで無駄であると論者は主張し、以下のようにつづける。

民族意識と歴史的権利のみが、人々がどの民族に属するかを決定する際に信頼に値する確かな基盤である。民族的起源の基準として言語を判断基準として受け入れるのは、まったくばかげていて、お笑い草である。というのは、この理論に従えば、イオアニアやクレタ島のイスラーム教徒はギリシア人であり、小アジアのギリシア人はトルコ人ということになってしまうからだ⁽⁴⁰⁾。

ここから論者は、民族意識は生来のものではなく、獲得されるものであるとの立場をとっていることが明らかである。同時に、民族意識の判断に際して、言語よりも宗教のほうが問題となることを示唆している。論者によると、キリスト教——より正確には、イスタンブルの世界総主教座に依拠する東方正教会——を信仰しているという事実が、ギリシア人としてのアイデンティティを決定づけるうえでより重要な要素であるというのである。この立場にしたがえば、トルコ語を話す小アジアの正教キリスト教徒であっても、ギリシア人ということになる。さらに、そもそもはギリシア人の先祖を持つ者であっても、イオアニアとクレタ島のイスラーム教徒はトルコ人である。彼ら自身がトルコ人であると主張しているのであるからなおさらそうである、と論者は言う。同様に、「アルバニア語を話すイピロス住民が、声高に自分たちはギリシア人だと叫んでいるとき、世界の誰も彼らをヘレニズムから引き離すことなどできない

のである」⁽⁴¹⁾と、論者は主張する。

言語ではなく、個人の感情あるいは意識によって規定されるヘレニズムによって、新たに獲得した土地が正当な自国領であるとするギリシアの主張は、より説得的なものになりえたかもしれない。ギリシア語に縛られないヘレニズムは、ギリシア国家が、歴史的・文化的理由から自国領であると見なす土地にたまたま生れ落ちたり、たまたま暮らしていたより多くの人々を、ギリシア人として包摂する可能性を持っていたからである。この立場にしたがうならば、人はギリシア人として生まれるだけでなく、望みさえすればギリシア人になることができたのである。

しかしながら、高度に主観的な基準であるギリシア人としての意識を基盤とするこのヘレニズムは、ギリシアの民族主義者にとって方便にすぎなかったという見方をすることもできよう。確かにわれわれは、個々人の意識が、民族としてのアイデンティティを決定するという主張を完全に否定することはできない。実際、バルカン戦争期には、確固としたギリシア人意識をもった非ギリシア語話者——ブルガリア語話者、ヴラヒ語話者、そしてアルバニア語話者——の存在を確認することができる。しかし、一方でまた、ギリシア当局に強制されて非ギリシア語話者がギリシア人を名乗っていた例にも事欠かない。ギリシア軍は、ギリシア語話者とブルガリア語話者がともに暮らしていた村や町を占領するやいなや、多くの場合、即座にブルガリア・アイデンティティを示すあらゆる証拠を消し去ることに心血を注いだのである。1913年のカーネギー財団によるバルカン戦争についての調査では、次のような報告がなされている。西部マケドニアに位置したカストリアでは、ギリシア軍による占領のあと、多くのブルガリア人がギリシア軍による民族意識の押し付けを経験することとなった。彼らが身の安全を守るには、2つの方法があった。ひとつは、「古代からギリシア人だったのに、ブルガリアの宣伝活動の影響に晒されてブルガリア人と呼ぶようになった」と宣言すること。もうひとつは、「1903年までは、住民はギリシア人だった。しかし、1903年から1906年のあいだにブルガリア人ゲリラ部隊に脅かされて、自分たちをブルガリア人と呼ばざるを得ない状況になった」というものだった⁽⁴²⁾。どちらの場合も、その宣言の最後の文章は決まっていた。それは、「ギリシア軍が到来するやいなや、住民たちはみずからのヘレニズムを感じ、『イエス・キリストの偉大な教会』のふところに受け入れられることを求めている」というものだった⁽⁴³⁾。この「ヘレニズムを感じ

じ」というフレーズは、ブルガリア人としてのアイデンティティは偽りのものでしかなく、自分たちはギリシア人であったことを思い出した、あるいは再認識したとされることを示唆している。

この種の強制的な宣言は、個々人の意識に基づくヘレニズムがいかに脆いものだったのかを、はからずも明らかにしている。このヘレニズムの言説は、非ギリシア語話者ギリシア人も、ギリシアの領土拡張という民族的大義を支持していることについて絶対的な自信を持っている。しかしながら、現実はそうではなかった。ギリシア政府は、ギリシア軍が占領した地域の非ギリシア語話者が、潜在的な危険分子となることを十分認識していた。だからこそ、占領地で非ギリシア語話者ギリシア人と呼ばれる人たちがギリシア語以外の言語をあからさまに使用することに対して、ギリシア当局は決して寛容な態度を示さなかったのである。

ヴティエリディスのヴォデナの言語状況についての描写からも、言語と民族意識の問題をめぐる、ギリシアの民族主義者の典型的な見解が浮かびあがる。ギリシア軍がヴォデナを「解放」したあと、ヴティエリディスはこの町を訪れた。ある日、彼は町の人々とともに散策し、「ギリシア人の子どもたち」に出くわした。そのときの状況を、彼は以下のように描いている。

「イマ！……ネマ！……」ある日、ギリシア人の子供たちが遊びながら叫んでいるのを私は耳にした。「どういう意味ですか」。私は〔同行者に〕尋ねた。「子供たちは、ブルガリア語を馬鹿にして、あのように叫んでいるのです」。と彼らは答えた。「『イマ』は、『ある』、『ネマ』は『ない』の意味です」。〔私は尋ねた。〕「でもギリシア人がブルガリア語を話すのですか」。〔同行者は答えた。〕「年配の者は、ブルガリア語を話します。でも、若い世代は、〔ブルガリア語を話すことは〕恥づかしいことだと考えています。ヴォデナはギリシアの町ですからね」⁽⁴¹⁾。

「ギリシア人の子供たち」が、ブルガリア語を「馬鹿にして」ブルガリア語を使っていたと客観的に証明できる者などいない。もしかしたら、ブルガリア語が彼らの母語だったという理由で、彼らはブルガリア語を話していたのかもしれない。彼らが「ヘレニズムを感じ」ていたのか、彼らが自分たちをブルガリア人とみなしていたのか、あるいはそのどちらでもないのか——誰にもわか

らないのである。カーネギー財団の調査によると、「勝者は名称や統計上の数字を変え、「おはよう」や「こんばんは」をブルガリア語で言うかわりにギリシア語で言うように、農民たちに教えることで満足している。けれども、民族意識が本当に変化したわけではない。」⁽⁴⁵⁾しかしながら、ギリシアの民族主義イデオロギーの観点からは、ヴティエリディスが出会った子供たちは、ブルガリア語とブルガリア民族を軽蔑するギリシア人以外の何者でもなかったのである。

5. むすび

19世紀の著名なギリシア人歴史家コンスタンディノス・パバリゴプロスは、1881年の講演で以下のように指摘した。ヘレニズムという言葉は、1830年代から1840年代にかけてのグスタフ・ドロイゼンの「アレクサンドロス大王」と「ヘレニズムの歴史」の公刊によって、ギリシア人知識人の間で、古代の輝かしい位置づけとともによみがえった。しかし、当時この言葉そのものは、ギリシア人一般にとってなじみのあるものではなかった。パバリゴプロスによると、ヘレニズムが東地中海地域で広く使われるようになったのは、1853年の政治的危機以降のことだという。そのときヘレニズムは、ドロイゼンのヘレニズムとはまったく異なる意味合いで用いられたことに注意しなくてはならない。ヘレニズムは、「ギリシア民族は、解放されたギリシアという狭い空間に閉じ込められているわけではない」⁽⁴⁶⁾と主張するために用いられたのである。近代のヘレニズムは、「政治的に分断されている〔ギリシア〕民族の精神的・知的統一」⁽⁴⁷⁾を表現している、とパバリゴプロスは主張する。ヘレニズムは、ギリシアの領土拡張運動と不可分の語である。

本稿で措定したバルカン戦争期の3つのヘレニズムは、パバリゴプロスの定義するヘレニズムを動的な側面からとらえなおしたものと言える。パバリゴプロスのヘレニズムが理論上の静的なものであるのに対して、これら3つのヘレニズムは、バルカン戦争という領土拡張のチャンスがめぐってきたなかで、ギリシア・ナショナリズムを積極的に後押しして領土拡張を実現させようとした、当時のギリシア人の実際の活動を背景にした、動きのあるヘレニズムである。他民族と敵対していると考えるギリシア人の危機感、そして、それら敵対者と戦って政治的な統一を成し遂げなければならないという強烈的な意識が、二項対立関係のなかにある、ギリシア人としてのヘレニズムを生み出した。文明

の概念に支えられたプラスの価値を持つヘレニズムは、バルカン半島におけるギリシアの文化的・歴史的遺産の永続的な影響を証明するのに必須のものであった。ギリシアの文化的・歴史的遺産から除外された者、とりわけ非ギリシア語話者は、みずからをギリシア人とみなすヘレニズムの言説によって、ギリシア民族の仲間入りを果たすことができるとされた。

二度のバルカン戦争は、ギリシア人が民族としての自信を取り戻すまたとない機会を提供した。彼らは、1897年のオスマン帝国との戦争での惨敗と民族的屈辱からようやく立ち直ることができたのである。同時に、バルカン戦争での勝利は、ギリシア人の領土拡張の夢の実現の大きな一歩となった。その後の第一次世界大戦での勝利は、ギリシアが目標とした小アジアへの領土拡張を現実のものにしようとしていた。しかしながら、それにつづいたトルコ革命政府軍との戦闘に大敗を喫したことで、その夢は挫折する。この間、ヘレニズムは、さらにさまざまな意味やニュアンスを内包していくことになる。その意味内容については、別稿に譲ることとする。

《注》

- (1) 《Αι Θνοίαι», *Ελληνική Επιθεώρησις*, 64, Φεβρουάριος 1913, σ.46.
- (2) Στο ίδιο.
- (3) A. R. (Athos Romanos), *The Persecution of the Greeks in Bulgaria* (London, 1907) : Theodora Dragostinova, *Between Two Motherlands: Nationality and Emigration among the Greeks of Bulgaria, 1900-1919* (Ithaca and London, 2011), pp.39-48.
- (4) Πέτρος Αξιωτίδας, «Ο εν Θράζη Ελληνισμός», *Παναθήναια*, 25, Μάρτιος 1913, σ.216.
- (5) Μανούλης Κοσταντάς, «Οι Βούλγαροι», *Παναθήναια*, 26, Μάιος 1913, σ.58.
- (6) Στο ίδιο.
- (7) 例えば, Βρούτος (Ίων Δραγούμης), «Τιμή και Ανάθεμα», *Ο Νουμάς*, 497, 29 Δεκεμβρίου 1912, σσ.545-549.
- (8) Ανδός Ποδαβρός, «Τί Χρειάζεται», *Ο Νουμάς*, 508, 1 Ιουνίου, 1913, σ.125. リドス・ボダヴロスという筆名は、偽名の可能性がある。
- (9) Ανδός Ποδαβρός, «Τί Χρειάζεται», *Ο Νουμάς*, 509, 22 Ιουνίου 1913, σ.138.
- (10) I.S. Stavrianos, *The Balkans since 1453* (London, 2000) [first published in 1958], pp. 510-511.
- (11) Δ. Καλλιμάχος, «Νέαι Ελληνικάί Πόλεις—Ο Πολιτισμός της Μουσχοπόλεως», *Παναθήναια*, 26, Απρίλιος 1913, σ.8.
- (12) Stavrianos, *The Balkans*, pp.510-511.
- (13) Δ. Καλλιμάχος, «Νέαι Ελληνικάί Πόλεις—Κορυτσά», *Παναθήναια*, 27, Οκτώβρι-

ος 1913, α.13.

- (14) «Ἐκκλησιᾷ πρὸς τὸν Λαὸν τῆς Κορυθαίας καὶ τῶν Περιχώρων», *Ακρόπολις*, 8 Νοεμβρίου 1913, α.2.
- (15) Ποδαβρός, «Τὶ Χρειάζεται», *Ὁ Νουμάς*, 509, 22 Ιουνίου 1913, α.138; Κώστας Ουράνης, «Βουλγαρικὴ … Χριστιανικὴ» *Ακρόπολις*, 20 Μαΐου 1913, α.2. も参照。ブルガリア人は、ギリシア人とセルビア人を「裏切り者の同盟者」と考えていた。これらふたつの民族は、第一次バルカン戦争では、ブルガリア人の同盟者であったが、第二次バルカン戦争では敵としてブルガリア人を攻撃したからである。したがって、ブルガリア人もギリシア人を否定的に描写している。ドラゴスティノヴァは以下のように書いている。「ブルガリア人は、ギリシア人を「下劣で、油断のならない、人を裏切り、物を奪い、獣のように残忍な」者と特徴づけ、ギリシア人を「詐欺師、匪賊、あるいは恐ろしい犯罪者」と呼んだ。ブルガリア人将校は、〔ブルガリア人のあいだで〕一般的だった〔ギリシア人に対する〕見方について手短かにこう述べている。「おまえはギリシア人だ」というフレーズは、「すべてのギリシア人がそうであるように、おまえは詐欺師だ」ということを意味している。」Dragostinova, *Between Two Motherlands*, pp.85-86.
- (16) 一例として、Κοστάντας, «Οἱ Βούλγαροι», α.59.
- (17) Ιλ. Π. Βουπερίδης, «Νέαι Ἑλληνικαὶ Πόλεις—Βοδενά», *Παναθήναια*, 26, Μάιος 1913, α.36. 1970年代のギリシア人考古学者マノリス・アンドロニコスによる発見によって、今日では、古代マケドニア王国の都アイガイは、ヴォデナ/エデサではなく、ヴェルギナであることが今日では確実視されている。ヨーロッパやアメリカの考古学者による、今日のギリシア南部の発掘は、ギリシア王国成立後、活発にすすめられていたが、マケドニア地域の考古学的調査は十分におこわれなかった。この地域が、いまだオスマン帝国領であったことと、バルカン諸民族の民族対立が激化したことが、その理由として挙げられる。以下を参照。Kathleen Donahue Sherwood, "Andronikos, Manolis 1919-1992", in Graham Speake ed., *Encyclopedia of Greece and Hellenic Tradition*, vol.1 (London and Chicago, 2000), pp. 79-81. 澤田典子「8. マケドニア王国発祥の地ヴェルギナ」「もうひとつのギリシア、マケドニア」周藤芳幸・澤田典子「古代ギリシア遺跡事典」（東京堂出版，2004年）pp.144-155.
- (18) アレクサンドロス1世の治世は、前497年頃～454年頃。マケドニア王国の建国にまつわる議論については、以下を参照。澤田典子「古代マケドニア王国の建国伝説をめぐって」「古代文化」第58巻第III号（2006年）pp.23-40.
- (19) Βουπερίδης, «Νέαι Ἑλληνικαὶ Πόλεις», α.36-37.
- (20) H. N. Brailsford, *Macedonia: Its Race and Their Future* (London, 1906), p.103.
- (21) Βουπερίδης, «Νέαι Ἑλληνικαὶ Πόλεις», α.38.
- (22) Στο ίδιο, α.38-39.
- (23) 1902年のオスマン帝国の統計によると、西トラキアには、ギリシア人87,000人(36.7%)、ブルガリア人35,000人(14.7%)、イスラーム教徒111,000人(46.8%)が住んでいた。1901年～1902年のオスマン帝国の統計に基づく分析によると、バルカン戦争以前の東トラキアには、ギリシア人253,000人(44.5%)、ブルガリア人50,000人(8.7%)、イスラーム教徒223,000人(39.1%)が存在した。A. A. Pallis, "Racial Migrations in the Balkans during the Years 1912-1924" *The Geographical*

- Journal*, LXVI, October 1925, pp.326-328.
- (24) Αξιωτίδας, «Ο εν Θράκη Ελληνισμός», σ.214.
- (25) Στο ίδιο.
- (26) Richard C. Hall, *The Balkan Wars 1912-1913: Prelude to the First World War* (London and New York, 2000), p.31.
- (27) Αξιωτίδας, «Ο εν Θράκη Ελληνισμός», σ.213.
- (28) Στο ίδιο.
- (29) Στο ίδιο, σ.216.
- (30) Καλλίμαχος, «Νέαι Ελληνικάι Πόλεις—Κορυτσά», σ.11.
- (31) Καλλίμαχος, «Νέαι Ελληνικάι Πόλεις—Ο Πολιτισμός», σ.5.
- (32) Στο ίδιο, σσ. 7-8; «Τα Ελληνικά Δίκαια και η Αλβανία», *Ελληνική Επιθεώρησης*, 70-71, Αυγούστος-Σεπτέμβριος 1913, σσ.172-173.
- (33) Καλλίμαχος, «Νέαι Ελληνικάι Πόλεις—Κορυτσά», σ.11.
- (34) «Τα Ελληνικά Δίκαια», σ.173; «Από τας Ηπειρωτικές Χώρας—Η Κορυτσά», *Εθνικό Ημερολόγιο*, 20 1915, σσ.310-311.
- (35) «Τα Ελληνικά Δίκαια», σ.173.
- (36) John S. Koliopoulos, *Plundered Loyalties: World War II and Civil War in Greek West Macedonia* (New York, 1999), p.17.
- (37) Χ. Χρηστοβασιλίδης, «Ο Αλή Πασάς και το Κράτος του», *Ακρόπολις*, 11 Οκτωβρίου 1913, σ.2. アリ・パシヤの生涯とギリシア史との関連については、以下を参照。K. E. Fleming, *The Muslim Bonaparte: Diplomacy and Orientalism in Ali Pasha's Greece* (Princeton, 1999).
- (38) «Ελληνικότης της Ηπείρου και τα Αισθήματα των Αλβανόφωνων Ελλήνων», *Ακρόπολις*, 18 Οκτωβρίου 1913, σ.2.
- (39) Στο ίδιο.
- (40) Στο ίδιο.
- (41) Στο ίδιο.
- (42) *The Other Balkan Wars: A 1913 Carnegie Endowment Inquiry in Retrospect with a New Introduction and Reflections on the Present Conflict* by George F. Kennan (Washington, DC, 1993), p.197.
- (43) *Ibid.*
- (44) Βουτιεριδής, «Νέαι Ελληνικάι Πόλεις», σ.38.
- (45) *The Other Balkan Wars*, p.200.
- (46) Κωνσταντίνος Παπαρηγόπουλος, «Ιστορία των Ονομάτων Ἑλληνες, Ελληνικόν Ἔθνος, Ελληνισμός», Κωνσταντίνος Δημαράς (επιμ.), *Προλεγόμενα* (Αθήνα, 1970), σ. 90.
- (47) Στο ίδιο, σ.91. トリアスは、ババリゴブロスの定義にしたがったヘレニズムは、1830年代のはじめにも用いられていたと論じている。George Tolias, "Totius Graecia: Nicolaos Sophianos's Map of Greece and the Transformation of Hellenism" *Journal of Modern Greek Studies*, 19-1, May 2001, p.16.